

〔原 著〕

## スポーツ系大学の学生が望む「コロナ禍の今, 受講したいテニス授業」とは —2021年及び2022年の調査結果から—

武 田 守 弘<sup>1</sup>

### What are the tennis classes that sports university students want to take now of the Corona disaster? —Based on the results of the 2021 and 2022 surveys—

Morihiro TAKEDA

#### Abstract

In this study, we conducted a questionnaire survey of students who belong to the sports department of our university in the situation of corona misfortune, and decided to reexamine the tennis lessons that university students want from the format, time, content, etc. From the results, it was suggested that there are many students who want 100% face-to-face meetings, but there are also a certain number of students, 10-20%, who want all online.

In addition, the characteristics of the sports students surveyed this time are that they have a strong desire to acquire skills, and that students who want to become teachers have a strong desire to learn teaching methods so that they can make use of them in future educational settings. It was suggested. In detail, we were able to extract many personal requests, such as wanting to enjoy tennis through matches, wanting to see professional play, wanting to confirm one's own technical improvement through a practical skill test, and so on.

#### Keywords:

新型コロナウイルス感染症, 大学でのテニス授業, 授業方法・内容の見直し, 計量テキスト分析

COVID-19, tennis class at university, Review of class methods and content, quantitative text analysis

#### はじめに

大学のテニスの授業の充実を図るために, 筆者はこれまでに様々な方策を検討してきた。武田(2012a)では, 受講する学生が感じているテニス

の「難しさ」を分析すること, そこから得られた「難しさ」を解消できるような授業展開の提案を行うことを目的としていた。結果から, テニスの「難しさ」は, 「サーブが入らずうまくいかないことが多い」, 「思うように打てない」, 「相手に対し

---

<sup>1</sup> 広島文化学園大学  
(Hiroshima Bunka Gakuen University)

て力加減した球が打てない], 「バックハンドで打つことやそのフォームが難しい], 「ラケットの真ん中にボールがなかなか当たらない], 「ボールが飛ぶのでコントロールが難しい], 「コートに入れることが難しい], そして「スピンをかけて安定させることが難しい」ことが具体的な難しさとして明らかとなった。また, 学生の属性, 技術レベル, テニス経験, 所属学科によってテニスの「難しさ」が異なることが判明した。学生に技能を獲得させるためには, 属性によって異なるテニスの「難しさ」を, 出来る限り解消させることが可能となる授業を展開しなければならないことが示唆された。

また武田 (2012b) では, 初心者学生を対象に, 目標到達型授業を展開し, 学生の授業に対するやる気・意欲を上げ, 主体的にスキル獲得に向けて取り組むよう働きかけていくことができるかどうかを検討することを目的としていた。テニスの難しさの分析, ストロークにおける個人目標到達度, 授業評価アンケートの結果から, テニスの難しさを踏まえた授業展開, 携帯電話の動画撮影機能の活用など行ったことにより, 学生の授業への興味関心, 意欲やる気については高評価を得た。さらには, スキル獲得に関して, 多くの学生が受講当初を上回るスキルを獲得したことを報告している。

さらには武田 (2020) では, 各ショットにおいて技術が向上したことを示す基準段階を作成し, その基準をクリアしていくことで昇級していく制度「テニスチャレンジ」を導入することで, 各技術が向上する道筋を受講者自身が常に意識できることにより, 自己の技術レベルを向上させようと意欲的に行動し, その結果技術の向上に有益かどうかを検討すること, 同時にその課題や問題点を明確にすることを目的とした。結果からは, 目標が明確になり練習しやすく自分の技術向上を実感できる, 難しい課題や様々な課題にもチャレンジしようとする, 対象者同士のコミュニケーションにより学習が促進できるなどの効果が示唆された。その一方で課題としては, 対象者のチャレン

ジに対してそれをチェックする人員が少ないとチェックを受ける回数や時間が制限されるため, 対策が必要であることが示唆された。

しかしながら, これらの研究は当然ながら, 全て対面形式で行われることを前提としたものであった。2020年中国の武漢を発生源とされる新型コロナウイルス感染症の蔓延・拡大に伴い, 授業は対面からオンラインへと移行せざるを得なくなり, 実技系の授業においては形式及び内容を含めて, 大きな変革を迫られることとなった。

難波ら (2020) によると, 「2020年前期には大半の大学で遠隔授業が行われており, 体育実技授業において, 本調査の対象者では91.6%が遠隔体育実技授業を行っていた。コロナ禍での自粛生活が続く中で, 身体活動の低下やメンタルヘルスの不調が報告されており (Gallè, et al., 2020; Woods, et al., 2020), 緊急事態宣言下における遠隔による体育実技授業について, 教員がどのような方針のもとで実施し, 受講者にどのような成果が得られたのかを明らかにすることが重要であると考え, 調査を実施した。分析の結果, 教員の約8割において, 遠隔による体育実技授業に係る労働時間が1.5倍から3倍以上に増加したと回答したため, これまでの体育実技は対面で行うことが前提であったため, 多くの教員に負担や戸惑いが少なからずあったことが示唆された。一方, 授業により「規則的な生活習慣」, 「体力・身体活動の増強」, 「自主性や自発性」の教育効果を感じていた教員が半数程度いたことが示されたが, 「対人コミュニケーションスキル」や「学校への適応」については達成しにくかったことが明らかとなった。], 「自由記述による定性的な調査では, 身体活動・運動・スポーツの価値は遠隔では伝えきれないこと, 実技授業による運動技能の教授は遠隔では限界があること, 学生の縦断的な達成具合を評価できないこと, などを感じていたことから, 自己矛盾を感じながら授業を担当していたと考えられた。」と報告している。すなわち, 授業を行う多くの授業者は, コロナ禍以前の数倍の時間をかけて, 遠隔教材を作成し, 遠隔での教授法を模索し

ながら、学生とのやり取りを行い、成績評価を行っているものの、身体活動・運動・スポーツの価値は遠隔では伝えきれないこと、実技授業による運動技能の教授は遠隔では限界があることに対して苦悩していた現状が明らかとなったといえる。

平田（2021）は、コロナ禍における大学テニスの授業に関して「テニスの授業をどのように展開するかと言うよりは学生に対してどのように身体運動をさせるかに重点が置かれました。毎週、テニスに関する授業課題を提示する資料配布型で実施する場合、各ショットの打ち方という技術的なもの、ルールに関すること、用具に関すること、テニスの歴史等々テニスに関係すること、技術的なものに関しては、教員で動画を撮影して、その課題提出後に動画を見てもらって実際の打ち方等の説明を確認してもらおう形になると考えられます。（中略）学生からも実際にやりたかったという声は多く、体育実技は課題提出のみやオンラインでは学生の満足度は低くなると思います。」と述べている。このような危機的状況においても、大学のテニス授業が効果的かつ満足度を得られるようにあり続けるために、現在の大学生が「テニスの授業をどのように展開し、何を学びたいものとして望んでいるのか」等について今一度確認する必要性を強く感じた。また、この機会に、実現

可能かどうかに関わらず、テニスの授業で実践してみたい内容についても幅広く問う必要性を感じた。

以上のことから、新型コロナウイルスが拡大している現在の状況では、大学生のテニス授業に関する要望や考え方も変化している可能性がある。そこで、本研究では本学スポーツ系学部に所属する学生235名にアンケート調査を行い、大学生が望むテニス授業を形式、時間、内容等から再検討することとした。また、内容面では、実現可能不可能に関わらず、画期的な意見を求めることで、今後の大学授業における新たな展開を模索することを目的とした。

## 方 法

### (1) 対象者

2020年度及び2021年度にスポーツ指導実技BⅢ（球技：ネット型－テニス）を受講する学生、合計235名であった。

### (2) 調査時期及び調査内容

調査した時期は、2021年1月中旬に第1回目、2022年1月中旬に第2回目の調査を行った。図1に示したように、第1回目調査の時期は全国の複

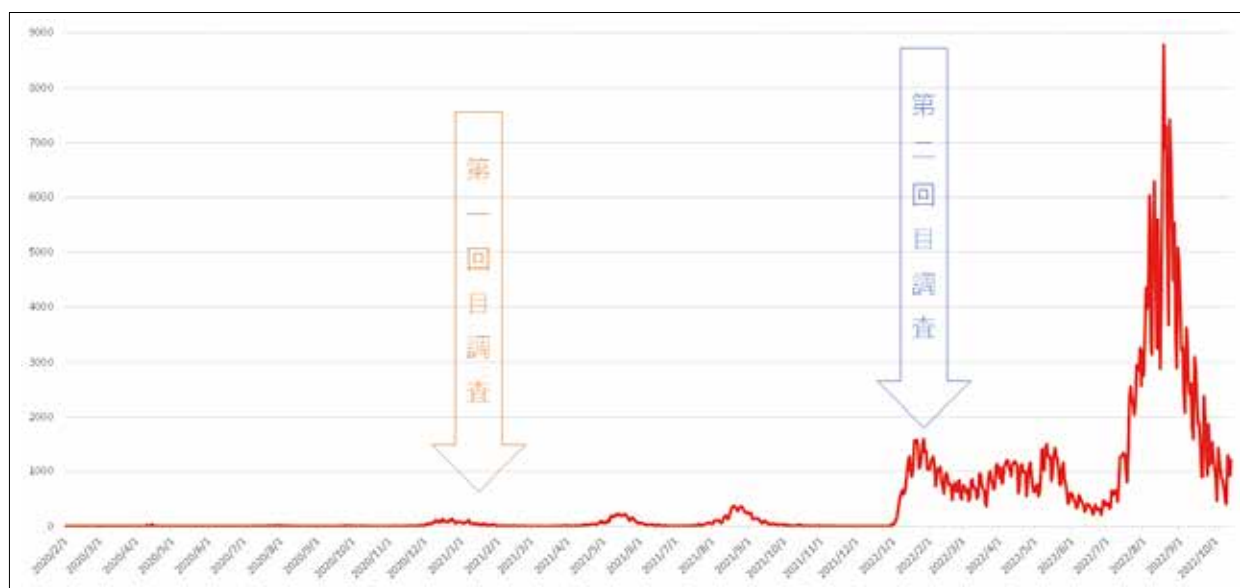


図1. 広島県における新型コロナウイルス陽性患者数の推移と本研究における調査時期

数の県に緊急事態宣言が出されており（広島県は対象外）、第2回目調査の時期は広島県にまん延防止等重点措置が出されている状況であった。

調査内容は、大学生のあなたが受けたと思う「テニス授業」について考えることとし、1)形式、2)時間、3)内容については選択形式で回答させ、4)内容についての詳細については、授業の中で扱って欲しい事柄や内容について、自由記述形式で回答させた。その際、実現可能かどうかより、純粋に行ってみたい内容、これまでにない画期的な内容について自由に記述するよう求めた。

1)形式については、「1. すべて対面（対面100%）」、「2. オンラインと対面のハイブリッド（オンライン25%、対面75%）」、「3. オンラインと対面のハイブリッド（オンライン50%、対面50%）」、「4. オンラインと対面のハイブリッド（オンライン75%、対面25%）」、「5. すべてオンライン（オンライン100%）」の5つから1つを選択する方法であった。

2)時間については、「1.90分」、「2.100分」、「3.120分」、「4.180分」の4つから1つを選択する方法であった。

3)内容については、「1. 技術の指導」、「2. 体力の指導」、「3. ルールの学習」、「4. 世界のテニスに関する情報」、「5. 日本のテニスに関する情報」、「6. 授業方法に関する内容（教育現場で活用するため）」、「7. 大会運営に関する内容（スポーツ現場で活用するため）」、「8. スポーツ科学を活かした測定（心拍数、球速測定など）」、「9. 自分の技術能力向上を確認するための、授業の初回と最終回での実技テスト」、「10. 自分の技術能力向上を確認するための、各回のチェック」、「11. 受講者による試合」、「12. 熟練者による試合の観戦」、「13. その他」の13種から複数を選択可能とする方法であった。

### (3) 倫理的配慮

本調査を開始する前には、調査の概要、プライバシーの保護、参加拒否及び中止が自由であるこ

と、論文・学会発表等で公表する可能性のあることを説明し、調査対象者の同意を得たうえで行った。

### (4) 分析方法

本調査の分析方法は、1)形式、2)時間、3)内容については、年度ごとの比較を含めて $\chi^2$ 乗検定を行った。有意水準は5%とした。4)内容についての詳細については、樋口（2017）を参考に、KH Coder 3.Beta.06aを用いて計量テキスト分析を行った。

## 結果および考察

### (1) 分析対象

スポーツ指導実技BⅢ（球技：ネット型—テニス）を受講する学生合計235名を調査対象としたが、2021年の調査は131名中124名からの回答（回収率94.7%）、2022年は104名中100名からの回答（回収率96.2%）が得られ、分析対象となった。

### (2) 望ましい授業の形式について

望ましい授業の形式について、調査年度ごとの調査対象者が選んだ回答を図2に示した。カイ二乗検定を行った結果、有意な差は得られなかった（ $\chi^2(4) = 1.761$ , ns,  $V = 0.089$ ）。回答数の上位は予想通り、各年共に「対面100%」で行われることを要望している学生が多かった（図2参照）。その一方で、「すべてオンライン」を希望する学生も10~20%と一定数存在している。年度ごとの比較では、2022年の「対面100%」が多く、「オンライン100%」が少ないことから、新型コロナウイルスの脅威を理解しつつ、活動欲求の高まりや他者との交流を積極的に求める様相が示唆された。

### (3) 望ましい授業の時間について

望ましい授業の時間について、調査年度ごとの調査対象者が選んだ回答を図3に示した。カイ二乗検定を行った結果、有意な差が得られた（ $\chi^2(3) = 12.550$ ,  $p < .01$ ,  $V = 0.237$ ）。残差分析の結果、90分

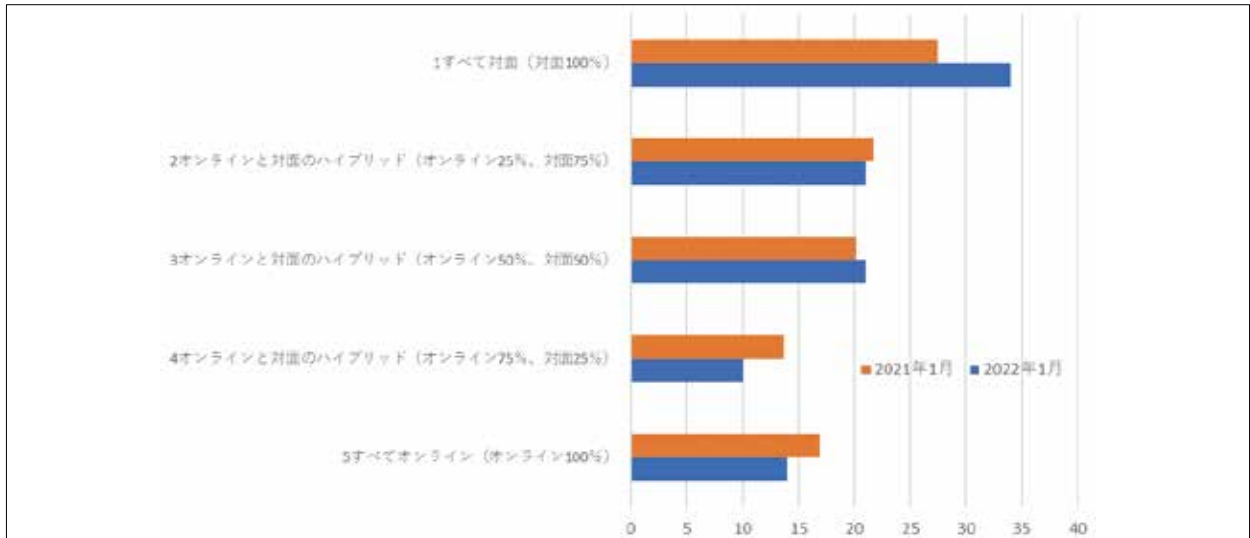


図2. 学生が望む授業形式 (回答割合)

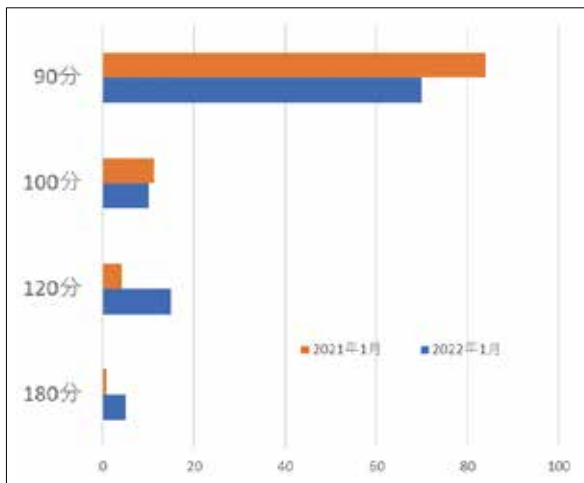


図3. 学生が望む授業時間 (回答割合)

を選んだ人数は2021年度調査では2022年度調査に比べて有意に多いこと、120分を選んだ人数は2021年度調査では2022年度調査に比べて有意に少ないことが示された。

全体的にみると、90分を希望する学生が70%以上と多く見受けられる。加えて、コロナによる行動制限の回数が重なりその影響がより強く及ぼすこととなった2022年では120分や180分を望む学生が存在し、実技授業への要望・期待を強く感じ取ることが出来た。

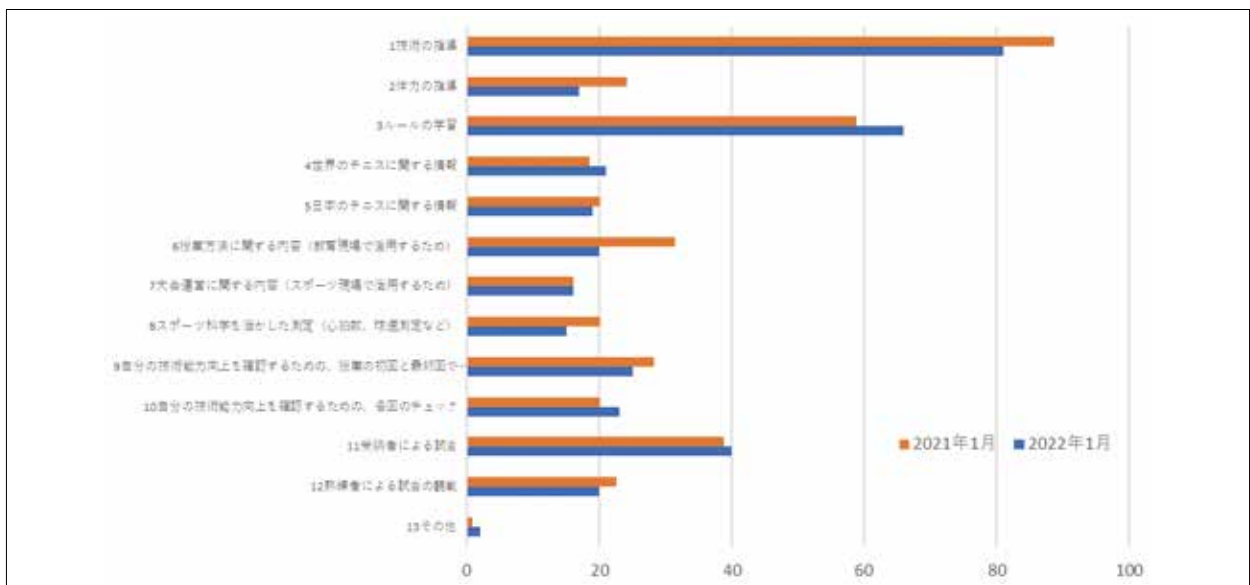


図4. 学生が望む授業内容 (回答割合, 複数回答可)

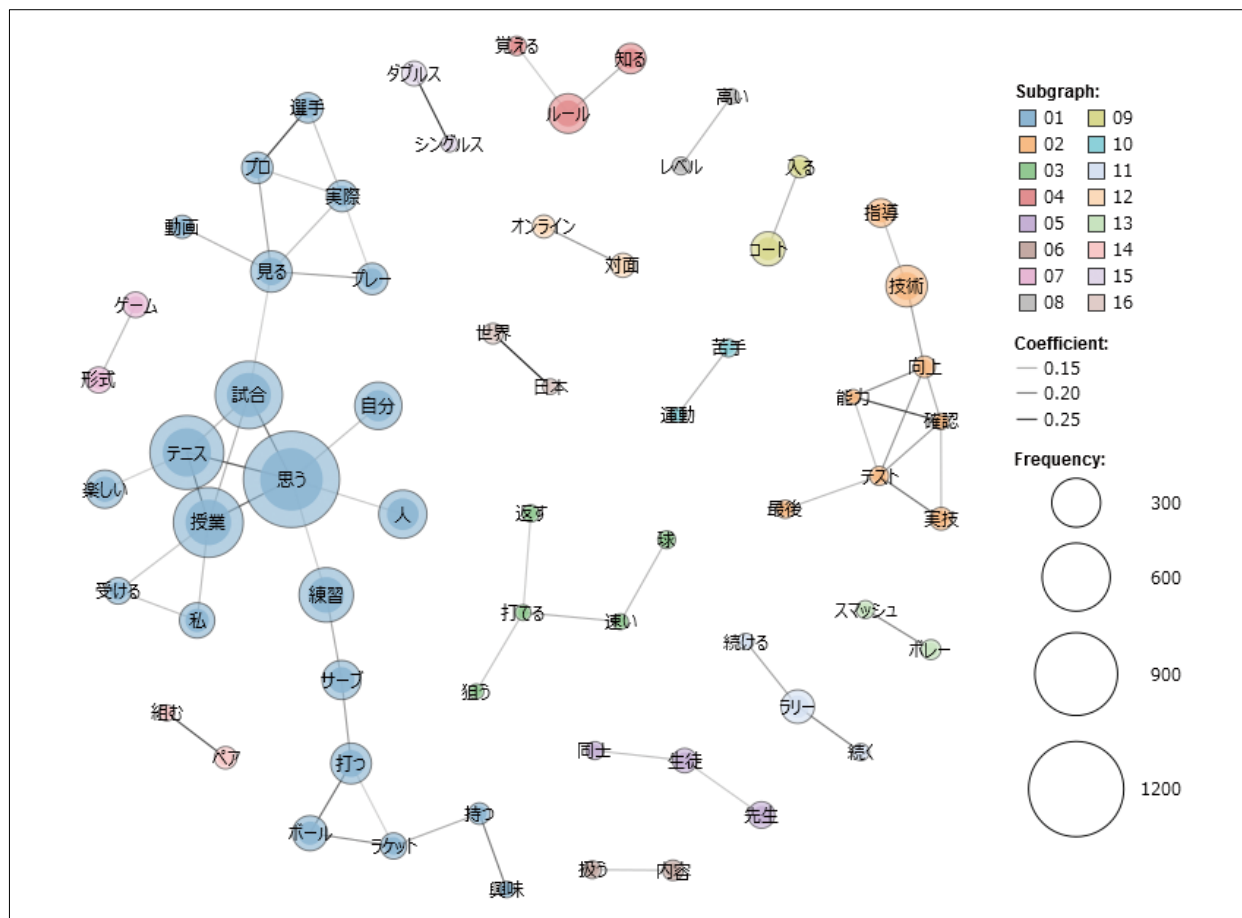


図5. 希望する授業内容の詳細についての自由記述の共起ネットワーク

(4) 望ましい授業の内容について

望ましい授業の形式について、調査年度ごとの調査対象者が選んだ回答を図4に示した。カイ二乗検定を行った結果、有意な差は得られなかった ( $\chi^2(12) = 5.352, ns, V = 0.084$ )。上位回答としては「技術の指導」、「ルールの学習」、「受講者による試合」が挙げられた。加えて、「(自分の技術能力向上を確認するための) 授業の初回と最終回での実技テスト」や「各回のチェック」、「授業方法に関する内容 (教育現場で活用するため)」という回答が上位であったことから、今回調査対象となったスポーツ系学生の特徴として、技能獲得に対して強い向上心を持っていることや、教職希望学生が将来の教育現場で活かすため指導方法を学ぼうとする強い意思が示唆された。

(5) 望ましい授業の詳細内容に対する回答の分析結果

KH Coderの共起ネットワークのコマンドを用い、希望するテニス授業の内容に関する詳細について、自由記述の中で出現パターンの似通った語を線で結んだネットワークを図5に示した。

分析者が特徴的な記述のまとめりと判断したものを項目として立て、対象者の実際の記述を「」内に原文のまま抜粋しつつ要約した。その結果、以下のように要約できた。

1) 試合などを通してテニスを楽しみたい

図5の真ん中左側から、「テニス初心者の自分からすると、試合に勝ちたいというよりは、ただ楽しみたいです。授業内で練習し、試合をたくさんして人と楽しめたらよいと思います。」という記述が見て取れた。

## 2) プロのプレーを見てみたい

図5の左上側から、「動画だけでなく、プロ選手の実際のプレーを見て学びたい。」という記述が見て取れた。

## 3) 自己の技術向上を実技テストによって確認したい

図5の真ん中右側から、「指導を受け自分の技術向上、自分の能力向上を確認したい。授業の最後に実技テストを行いたい。」という記述が見て取れた。

## 4) ラリーの中で速い球を打てるようになりたい

図5の真ん中から、「速い球を狙って打てる、返せるようになりたい」という記述が見て取れた。

## 5) 少数意見の結果

少数の意見としては、以下の回答があった。「審判の資格が取れるくらい勉強したい」、「テニスの中でも硬式と軟式どちらも教えてもらいたい」、「知らない人とチームやペアを組んで試合をすると、相手とのコミュニケーションが高まり、相手ができないこと・できることを瞬時に判断できるようになる」、「調べてみたらテニピンという楽しそうなスポーツがありました。これを気分転換にしてみたら楽しいと思いました。」、「テニスから発展したスポーツなどテニスに似ているスポーツも取り上げて勉強していけたら楽しいかなと思いました。」、「授業では男女のペアでやったら面白いと思いました。男女のペアを作ることで、男も女もどちらもやる気になると思います。」、「テニス部と同じ練習の仕方もやってみたいです。普段どんな練習をしているのか知りたいです。」、「ラケットやシューズの説明やメーカーなどの種類の説明を扱って欲しいとも思いました。」

## まとめ

本研究では本学スポーツ系学部に所属する学生にアンケート調査を行い、大学生が望むテニス授

業を形式、時間、内容等から再検討することとした。結果から、対面100%で行われることを要望している学生が多いが、すべてオンラインを希望する学生も10～20%と一定数存在していることが示唆された。また、今回調査対象となったスポーツ系学生の特徴として、技能獲得に対して強い向上心を持っていることや、教職希望学生が将来の教育現場で活かすため指導方法を学ぼうとする強い意思が示唆された。詳細としては、試合などを通してテニスを楽しみたい、プロのプレーを見てみたい、自己の技術向上を実技テストによって確認したいなどの他、個人的な要望も数多く抽出することが出来た。

現場への提言としては、新型コロナウイルス感染症の影響により、これまでの授業の形式・内容といった常識は一変せざるを得ない状況であっても、大学生の「授業内でこの内容を学びたい」という欲求を的確に捉え、授業を柔軟に変化させていくことで、学生の授業に対する満足度を向上させることが出来るのではないかと考えられる。

## 引用文献

- 1) 武田守弘 (2012a) 「大学生を対象としたテニス授業における効果的な授業展開の提案—テニスにおける「難しさ」の分析—」『福祉健康科学研究』第7巻(第1号), 47-55.
- 2) 武田守弘 (2012b) 「大学生を対象とした目標到達型授業の実践報告」『テニスの科学』第20巻, 82-83.
- 3) 武田守弘 (2020) 「大学生を対象としたテニス授業における技術向上に関する昇級基準設定型授業の実践報告」『テニスの科学』第28巻, 78-79.
- 4) 難波秀行, 佐藤和, 園部豊, 西田順一, 木内敦詞, 小林雄志, 田原亮二, 中田征, 中山正剛, 西垣景太, 西脇雅人, 平工志穂 (2020) 「授業者からみたコロナ禍に行われた遠隔による大学体育実技の教育効果の検証」『大学体育スポーツ学研究』18, 21-34.

- 5) Gallè, F., Sabella, E. A., Da Molin, G., De Giglio, O., Caggiano, G., Di Onofrio, V., and Napoli, C. (2020) Understanding knowledge and behaviors related to COVID-19 epidemic in Italian undergraduate students: The EPICO Study. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 17:3481.
- 6) Woods, J.A., Hutchinson, N.T., Powers, S.K., Roberts, W.O., Gomez-Cabrera, Mari Carmen, and Ji, L.L. (2020) The COVID-19 pandemic and physical activity. *Sports Medicine and Health Science*, 2: 55-64.
- 7) 平田大輔, 2021, 大学体育におけるオンライン授業の成果と課題. *テニスの科学*第29巻, 58-59.
- 8) 樋口耕一 (2017) 計量テキスト分析およびKH Coderの利用状況と展望. *社会学評論*, 68(3): 334-350.

#### (和文要約)

本研究では, コロナ禍の状況で本学スポーツ系学部に所属する学生にアンケート調査を行い, 大

学生が望むテニス授業を形式, 時間, 内容等から再検討することとした。結果から, 対面100%で行われることを要望している学生が多いが, すべてオンラインを希望する学生も10~20%と一定数存在していることが示唆された。また, 今回調査対象となったスポーツ系学生の特徴として, 技能獲得に対して強い向上心を持っていることや, 教職希望学生が将来の教育現場で活かすため指導方法を学ぼうとする強い意思が示唆された。詳細としては, 試合などを通してテニスを楽しみたい, プロのプレーを見てみたい, 自己の技術向上を実技テストによって確認したいといった意見の他, 個人的な要望も数多く抽出することが出来た。

大学の教育現場への提言としては, 新型コロナウイルス感染症の影響により, これまでの授業の形式・内容といった常識は一変せざるを得ない状況であっても, 大学生の「授業内でこの内容を学びたい」という欲求を的確に捉え, 授業を柔軟に変化させていくことで, 学生の授業に対する満足度を向上させることが出来るのではないかと考えられる。